

## 資料紹介

## 国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『西行物語』 翻刻・附解題

## Research Materials

## 内田 滯子

## 解題

『西行物語』は、西行（一一一八～一一九〇）の「発心と修行の生涯を、歌と説話で綴る」物語である。作者未詳であるが、西行没後間もなく成立したと考えられている。鳥羽院に下北面の武士として仕え、突然の出家を果たし、蹴鞠等に長けた風流人で、『新古今和歌集』代表歌人の一人というその人生は、後世多くの人の興味と関心を集めた。人々の関心の深さ故からか、『西行物語』にも多種多様な異本が多く残されることになった。

これらの諸本は、先学によっていくらかの系統に分類されているが、大きくは広本系・略本系に分けられており、広本系を祖本系と位置付けることはほぼ定説化している。<sup>(2)</sup> 稿者は先に国立歴史民俗博物館に蔵される田中穰氏旧蔵の『西行物語』（以下「田中本」と略称）を紹介し、これが広本系に分類できる一伝本であることなどを示した。<sup>(3)</sup> 以下前稿に拠りつつその特徴や意義などについて略述して解題とする。

『西行物語』広本系の諸本の中には、諸本中で最も古い写本とされる、伝土佐経隆筆絵巻系徳川家本・旧峰須賀家本（十三世紀中か）<sup>(4)</sup> や、白描

西行物語絵巻（十四世紀末頃）<sup>(5)</sup> などが含まれているが、いずれも残欠本で全容が知られない。物語の全文を有する広本系の本文として専ら用いられるのは、通常「文明本」と呼ばれる文明十二年（一四八〇）の書写奥書を持つ宮内庁書陵部蔵『西行物語』である。「田中本」を「文明本」と比較すると、「田中本」は広本系の物語としてのトピックをほぼ全て備えており、同系の一本とすることができると、これら先行する諸写本よりも、初期的な『西行物語』本文の痕跡を留めているのではないかと思われる。

まず「田中本」の表現は広本系の「文明本」や彰考館蔵『西行一生涯草紙』（以下「彰考館本」と略称）などに比して、表現が簡略・淡泊で、文飾の度合いが大変低い。これは一般には古態を示す特徴である。更にこのことも関連して、初期的な『西行物語』に『発心集』などから取り込まれたのではないかと考えられている箇所も「田中本」には見えない。特に、西行の妻娘に関わる記事は、最小限に少なく、末尾部分西

行没後の後日譚となる妻娘の往生譚も記されていない。

『西行物語』が当初、西行の一生を記すものとして構想された、という見通しを尊重するならば、西行の有名な「ねがはくは……」の歌で物語が閉じられる「田中本」のかたちは、この構想に適ったものと見做すこともできる。又、愛娘を縁から蹴落として恩愛を断ち切り、出家を果たす場面の描写では、同場面を持つ他のどの本とも異って、娘を「蹴落とす」のではなく「突き落とし」ている。妻娘に関わる表現が少なくことも併せて、注意される表現ではないだろうか。

西行自身の往生を語る部分の表現についても、「田中本」は独自の特徴を有する。西行の没年を「建久九年二月十五日」とすることは、広本・略本系を問わない『西行物語』の特徴のひとつとされている。〈史実〉としての没年は『拾遺愚草』等により「建久元年二月十六日」と伝えられるが、年代表記の誤写や、釈迦入滅日の「二月十五日」に引きつけられる形で「建久九年二月十五日」となり、『西行物語』ではこれが踏襲されたためと考えられている。しかし、「田中本」は没年月日を〈史実〉通りに記している。「ねがはくは……」の和歌の後、空白を明けて丁を繰り、そこに改めて「建久元年二月十六日に西行卒」と記す記し方の意味などと併せて、検討が必要であろう。

物語全体の構成を見渡すと、これは「文明本」とほぼ同じである。ただ「文明本」前半に記された大峯修行に関わる記事が、「田中本」では二つに分断されて、別の場所に収められている。卷子単位などでの錯簡などの可能性も考慮しつつ考察する必要があるように思うが、これも含め「彰考館本」との関わりが注意される。「彰考館本」は早く『史籍集覧』に活字化して収められた。しかし錯簡が著しく、これまで広本系の重要な一伝本と目されながらも「有錯簡、殆不可通説也」等ともされて、あまり利用されてこなかった。

「彰考館本」の本文は細かい内容毎に記事が大きく錯綜しているのだが、

冒頭から順に巻一〜六までの巻数が記されている。この内、一・二・五・六巻と振られた箇所は、「田中本」の冒頭及び巻二・三（但し「二」と表記される）・六と頭書する箇所と内容がほぼ合致している。巻の番号は異なるが、同内容の箇所が替わっていることが知られ、このことは「彰考館本」の錯簡を正す手がかりとなるのではないだろうか。のみならず、『西行物語』が六巻に仕立てられてあった形態、「田中本」に三箇所記された「絵あり」という文言からは、絵巻の形態との関わりについても、検討の為の情報を提供するものである。

最後に「田中本」には、慶長五年（一六六〇）の「八幡橋本満介入道等安」なる人物の手になる書写奥書が記されている。「八幡橋本」は、石清水八幡宮の鎮座する男山北西に位置する、現在の八幡市橋本町にあたる。橋本町は石清水八幡宮の門前町のひとつで、八幡宮社士や神人、特に石清水の神事である安居神事において、堂莊嚴の頭役を勤める資格を有した神人の居処のひとつとされている。

書写者「等安」は、慶長五年四月の「石清水八幡宮御神領之内、社司安居脇頭神人、指出シ之帳」<sup>7)</sup>に、橋本町の安居本頭（＝頭役）神人の筆頭として名があげられている。「高五拾七石四斗七升、橋本町、橋本等安」などとあり、またやはり慶長の「棟札写」などにも名を連ねることから、相応の財力も有した者であったことが推察される。

冒頭に触れた通り、『西行物語』は幅広く多様な享受を受けたと思しく、その多様さそのものを検討の対象にする必要がある。「田中本」は、近世初頭の石清水神人によって書写されているという情報も含め、『西行物語』研究に質する一伝本であるといえよう。

註

- (1) 『日本古典文学大辞典』（明治書院）、「西行物語」項（木下資一）。
- (2) 『西行物語』諸本に関する論考は、小島孝之氏「『西行物語』小考」（論集『西行』笠間書院、一九九〇）、礪波美和子「『西行物語』諸本について」（人間文化研究科年報第十一号、一九九六年）他多数。
- (3) 拙稿「国立歴史民俗博物館蔵・田中穰氏旧蔵『西行物語』考」（『和歌文学研究』八六号、二〇〇三年）。
- (4) 千野香織「『西行物語絵巻』の復原」（日本絵巻大成二六『西行物語絵巻』一九七九年）。
- (5) 宮次男「白描西行物語絵巻」（『美術研究』三三二号、一九八二年）。
- (6) 『史籍集覧』所収『西行一生涯草紙』編者近藤瓶城氏識語。
- (7) 『石清水八幡宮史』史料第六輯（二刷一九九五年）「社領編」所収。

『西行物語』翻刻

凡例

- 一 以下は田中穰氏旧蔵典籍古文書H一七三四一・一三〇『西行物語』を翻刻したものである。
- 一 漢字・仮名の別、改行箇所などは原則として原本の通りとし、句読点・濁点を私に附した。漢字の字体は原則として通行の字体を用いたが、一部原本の用字を残した箇所がある。
- 一 原本には傍書や抹消記号などが附された箇所があるが、出来るだけ原本の通りに盛り込んだ。
- 一 □は一字、「」は文字数不明の虫損等による欠字・不可読箇所等である。残画などにより推察が可能な場合は、ルビに「（…カ）」と記した箇所がある。
- 一 収載の和歌（全二〇四首）には、冒頭から算用数字で私に通番号を振った。

西行物語 (原表紙外題)

大治二年之比、鳥羽院、北面に召仕はれける<sup>(ママ)</sup>左藤兵衛  
範清と云男有ける。つはもの、かたは、正門・保正が跡を  
伝へ、心のたけき事長良が武勇にもまされりけり。

詩歌管絃の道、業平・紀納言が跡を伝へぬふしもなく、  
ならはぬことのはぞなき。されば花の春月の秋たゞには  
すぐさゞりけり。誠に朝家のたからとして、一人三公ことく

くいみじき物とぞさだめられける。然ば地下の賤しな、れども、  
殿上の賢き御遊にもめされつ、詩を作哥をよみ、昔

にはちぬ達者なりとぞいはれける。されば君もいつくしみ  
ふかくして、御幸にしたがはぬたびはなかりけり。法勝寺御  
八講に御幸なりけるに、門堅のために、六条判官為義

「一丁オ

院宣を承て、子息ども引くして西門を守護しけるに、

範清共奉<sup>(ママ)</sup>したりけるが、郎等一人をしへだてられて、爲義

下部にからめとらる、よし聞て、阿弥陀堂の門より童一

人ばかりぐして出て思けるは、六条の判官に事の子細尋に、

あしき物ならば、いかにもなりなと思ひて、行てたづぬれば、

堅て候門をやぶりとをり候間、下部どもからめて候也。

努々、御殿人とはうけ給候はずと、座をば立向ひてなだめ

申ければ、範清帰りにけり。さて思ひけるは、此世をばかりの

宿と思候も、名利にほだされて後世を空くならん事よし

なしとぞ、是につけても思ひける。

絵あり

帝もいみじきものに思召ければ、とく／＼庭尉になし

「一丁ウ

給ふべきよし御叡慮ありけれども、罪ふかき司とて

坂上の正助が検非違使にならじとて五位のかうぶり給ひ

けん事も思ひしられて、とかくのがれ申けれ。たゞ心の

うちには、はかなくあだなる夢の世は、浪の上の月しづまり  
がたく、ふゆふといふ虫は朝に生れて夕に死、なをたのみ  
あり。出るいきは入いきをまたぬならひをしらずして、五  
欲のきづなにひかれて、ならく古郷へ帰なんことのみぞ  
なげかれける。

妻子珍宝及王位 臨命終時不隨者

唯戒及施不放逸 今世後世爲伴侶

を心につけて、彼花山の法皇は此文の故にこそ十善の

「二丁オ

位を捨て、那智御山に行給て、つゝに仏道ならせ給ひける。

龍就菩薩<sup>(ママ)</sup>の給く、富といへども願心やまざればまづしき

人とす。貧けれども願もとむる心なければ是を富とす。

書写の聖空聖人はひぢをかゝめて枕とす。楽其うちに

あり。何によつてか、更に風雲の榮耀をもとめんと

かけり。まことに意馬六塵のさかひにはせ、心猿十惡の枕に

うつる。山のかせぎつなぎがたく、家の犬つねになれたり。

片山陰の住居、柴の庵にこもり入なと思たつころ

かくぞよめる。

1 いつ歎きいつ思「一」事なれば後の世しらで人のすぐらん

2 いつ世に永き眠の夢覚て驚く事のあらんとすらん 「二丁ウ

3 何事にとむる心の有ければさらにしも又世のいとはしき

此人つねに心をすま□□人丸・赤人の流をうけて和哥

をこのむ事、人に勝たりければ、君も四季折節の題を

たびて、哥めされければ、時をたがへずよみてまいらせ

ける中に、はつ春の哥

4 岩まどちし氷もけさはとけ初て苔の下水道もとむなり

5 立かはる春をしれとも見せがほに年をへだつる霞成けり

6 鶯のこゑぞ霞にもれてくる人めとしき春の山里

鳥羽殿へ御幸ならせ給ひて、始たる御所の御障子の

絵の面白かりけるを御覧じて、其時の哥人民部卿

経信・中納言匡房并に基俊・俊頼などめされて、

「三丁オ

われもくといとなみよめれける中に、範清を召て、此絵

どもの中にさるべき所どもに哥よみてまいらすべきよし、

仰られければ、其日の中によみて申上げる哥どもに、

はつ春の雪積たる山のふもとに谷川のながれたる所を見て、

7 降つみし高ねのみ雪解にけり清瀧川の水のしら浪

山里の柴の庵に聖のこもりたるまへに、梅開たる所をか、れければ、

8 とめこかし梅盛なる我宿をうときも人はおりにこそよれ

花の開たる下に居て月を詠る男のありける所を、

9 雲にまがふ花の下にてながむれば臙に月は見ゆる成けり

夏の始に郭公を尋<sup>(マカ)</sup>山田の原の杉の本に居て

ながめたる男の形か、れたりければ、

「三丁ウ

10 なかずとも爰をせにせん時鳥山田の原の杉の村立

時鳥の初音尋ぬるかひ□て、聞付たる所か、れければ、

11 子規ふかき峯より出にけり外山のすそに聲のきこゆる

清水の流たる柳の陰に水結ぶ女房を書たれば、

12 道のべの清水ながる、柳かげしほしてこそ立どまりけれ

秋のはつ風心ばそくか、れたりける所に、

13 哀いかに草葉の露のこぼらん秋風たちぬ宮城野のはら

山田守いほりのほとりに鹿の鳴たる所を見て、

14 小山田のいほ近く鳴さをしかにおどろかされておどろかす哉

高き山に白雲のかゝりたるを見て、

15 秋篠や外山の里や時雨らん生駒の高に雲のかゝれる 「四丁オ

おく山の峯の梢風にさそはる、處ありければ、

16 小倉山麓の里に木葉ちれば梢にはる、月を見る哉

勅定の<sup>(マカ)</sup>かれたき故に御障子の絵の哥十五首を日の

中につらねて奏し申ければ、能々御了簡ありて、希代

の名哥、末代の秀逸なりとて、其時の斗書定信・時

信等を召てぞかゝせられける。大治二年十月十一日かとよ。

勅縁<sup>(マカ)</sup>にあさひ丸と申御はかせを赤地の錦の袋に入て

頭の弁の承にてぞ給ける。女院の御方へめされ、権中納言

殿御局御奉行にて、御はしたものの、乙女のまへ紅の十五重

なりたる御衣をいた□□かづけられけるを、見る人々目を

驚うらやみ相けるこそ、今生の執心とまりて哀に忝、 「四丁ウ

よろこびのなみだたもとにあまりけり。 絵あり

日も暮ければ、わが宿に<sup>(マカ)</sup>かへりけるに、妻子一族までも

よろこぶ事かぎりなし。是につけても世のはかなき事

心にしみて、佛の道に入なんのみぞ思はる。折しも同北面

にさぶらひける左藤左兵衛門尉範保、使の宣旨を給て帰り

けるが、こよひねしに、死しけるとて門に人あつまりさは

ぎぬ。中には、泣かなしむ聲きこゆ。つまは十九、母は五十余

になりぬるといふ。なげくもことほりなり。いよゝかきくらす

心ちして、風の前灯、はすのうき葉の露、夢のうちの夢と

思ひぬれば、そこにも本ゆひきらんとせしかども、いま一度

参、君に御いとま申さんとて、駒をはやむれども涙は袂に 「五丁オ

せきあへず。此人はわれに二つの兄にて生年廿七ぞかし。をくれ

ささだつためし、老少不定のならひ、あはれなること也。

朝有紅顔誇世路 暮成白骨朽邦原

17 越ぬれば又も此世に帰りこぬ死出の山こそかなしかりけれ

18 世中を夢と見るくはかなくも猶おどろかぬわが心かな

19 年月をいかで我身にをくりけん昨日の人も今日なき世に<sup>(マカ)</sup>



二卷

れいならずことにきらめきまいりたれば、人々も目をおどろき、君もいみじく思召て、昨日の哥の御感ども綸旨をくだす所に、思はずに頭の弁をもつて出家のいとまの事を

奏申たりければ、ことに驚思召。ゆるされなかりけれども、心中に思しめたる事なればとゞまるまじと思ふにも、かたじけなく龍顔を拝し、宣下をうけ給らんこと只今ばかり、

三臣公卿の御まなじりにかゝらんことも今日ばかりと思

にも、名残すくなくならず、南庭の花の本、西樓の月の前の御遊にもめし出されし事、思ひつゞくるに、泪もとゞまらず。

されども心つよく思とりしかば、去二月にすでに出家せんと思ひさだめし時かくよみしぞかし。

20 空にたつ心は春のかすみにて世にあらじとおもひたつ哉  
いまだ其期<sup>きき</sup>やきたらざりけん、二月も過て七月に又思ひ  
さりて月の面白かりしにかくぞよみける。

21 世のうきに一方ならずうかれ行心さだめよ秋の夜の月

22 物思ひてながむる比の月の色にいかばかりなる哀しるらん」六丁オ

23 をしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋の夜の月  
秋も又のがれて、此たびの出家さはりなくとげさせ給へと

三宝にきせい申て宿に帰りければ、四つなる女子の出む

かひて、父のきたるがうれしきとて、袖に取付たるを、是こそは

煩惱のきづなと思ひきりて、ゑんより下へつきおとしければ

なきかなしみけれども、耳にも入らずしてうちに入て、今夜計

の宿りぞかしと、泪にむせびてぞ哀におぼえける。女はかね

て男の出家せんことをさととり、此むすめのなくをも、おどろく

けしきなかりけり。

絵有

24 露の玉消れば又□をくものをたのみもなきはわがみ成けり

十五夜の月の半ばになるまでながめて思やう、万法は心が」六丁ウ  
所作、さらに別の法なし。人界に生るゝ事は、梵天より糸を

くだして大海の底なる針の穴をつらぬかんよりは賢、仏教にあへる事は、一眼の亀の浮木の穴にあへらんがごとし。

此たび遁世して佛道をえんと思ふ。人木石にあらず。好はをのづからといへり。其流転生死のつたなき身なりとて、

不退の浄土に生れがたとしとひげすべからず。梅檀の林に

入ぬれば衣をのづからかうばし。麻の中の蓬はためざるに

なをし。松にかゝれるかづらは千尋にのぼる。切利天<sup>マヤ</sup>の園には

歛<sup>マヤ</sup>衣の色をふくみ、蓮世界の鳥は妙法の文をさへづる

がごとく、宝の山に入手をむなしうて帰らん事、あに佛の

御心になはんや。しかあれば名聞憍慢の心をとめて慳」七丁オ

貪嫉妬の思をわすれ、邪見放逸の罪を不作、姪酒

妄語の戒をやぶらず、一方に佛にならんと思とりて、

西山に月もやゝかたぶきにしかば、只今こそかぎりと思て

妻女に有べき事様〳〵にかたりしかども、さらに返事も

せざりけり。さりとてとゞまるべきにあらざれば、心つよくもと

ゆひきり、年比しりたりける嵯峨の奥の聖のもとへ、其

暁に尋行、出家をとげけり。其朝聖たち、こはいかにと

申あひければ、

25 世を捨る人はまことにすつるかはすてぬ人こそ捨るなりけれ

26 うけがたき人の姿□うかび出てこりずや誰も又しづむべき

27 よをいとふ名をのみもさはとゞめ置て数ならぬ身の思出にせん

」七丁ウ

此人常に、観念窓中心繫三明月坐禅床上眉垂八

字霜と觀じ、諸行無常は天にのぼるはじめ、是生滅法は

愛欲の川を渡る舟、生滅々已は劍の山を越る車、寂

滅爲楽は八相成道の証果なりと観じて、更に憂世の塵にほだされじと思ひける。

28 さびしさにたへたる人の又もあれなほりならべん冬の山里

29 身のうさを思ひ知らでややみなましそむくならひのなき世なりせば今年もすでに暮なんとす。さてもこぞまでは年の暮の

いとなみども様々にせしかども、今はさすがにと思て、

30 をのづからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほどに年の暮ぬる

31 昔おもふ庭にうき木をつみをきて見し世にも似ぬ年くれ哉」八丁オ

32 年暮し其いとなみは忘られてあらぬ様なるいとなみをぞする

年立帰る祝ともことには西方にむかひて、臨終正念往生極

楽とぞおがみける。高きも賤も世に有人は、皆む月の始には

嘉辰冷月のよるこび、万歳千秋の楽、長生殿のさかへ、不

老門日月、鶴と亀とのたはぶれ、子日の松のかざり、野べ

の若菜の手すさみ、我もくとする事は、春の夜の夢

ぞかし。官位の臨み珍宝のたくはへ、水のあは、まぼろし

のごとしと観じて、此春のうちに往生をとげばやと

こそ佛神に申。されば、庵の前に梅花の開たるを、過

ける人さへ指入て、

33 心せんしづが垣ねの梅はあやなしよしく過る人とめけり

「八丁ウ

34 香をとめん人をこそまで山里の垣ねの梅のちらぬかざりは

そばなる庵室に又垣根の梅のなつかしき匂ひ風に

さそはれて、

35 主いかに風わたるとていとふらんよそにうれしき梅の匂を

花おもしろしと思て、しづかに行て見るところに、昔

なれたりし人花見にとて尋来けるをみて、心の乱ければ、

36 花見にと群つ、人のくるのみぞあたら桜のとがには有ける

すでに出家をとげて菩提心の道に入ぬ。今は罪作し處の罪障を懺悔せんと思ふ一念に、なす處の思ひ皆

三途の業也。善心はすくなく悪心はおほし。罪は百丈の石、

懺悔は舟也。罪をもき百丈の石なれどざんげの舟に乗て

生死の苦海を渡て、ぼだいの岸になどかつかさらん。事

理のざんげに五鉢を地になげて、一心に念仏をととなふ

れば、草木の薪を百万里につむといへども芥子ばかりの

火をもつて時の程にやきうしなひぬ。在欲の時作し百

万里のうちにすみし薪のつみ成とも、出家ざんげの芥子

ばかりの火をつけぬれば、たのもしくこそ覺れ。衆罪如霜

露、恵日能消除、是故応至心、懺悔六情根、此文の任て、

今は山林流浪の行をとげんとと思て、始の立出こそ哀

なれ。昔はいさ、かのありきにも郎徒を前後に引ぐして、

弓矢をたいせしぞかし。今は麻の衣を墨に染、念珠を

手にふれて、年比思し事なれば、先吉野山に入て

花を心にまかせてみるとて、尋行ども同心の人も見えざりければ、

37 誰か又花をたづねて吉野山苔ふみ分る岩つたふらん

桜の枝に雪かゝりて、花かと驚見れども花にはあらず、

38 吉野山さくらが枝に雪ちりて花をそげなる年にも有哉

花は東より開と云事のあれば、北なればをそきと思て、

道をかへて尋入けり。

39 芳野山こぞのしほりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

尋入たるかひありて、咲乱たる花のもとにて見れば、やがて

ちりければ、

40 詠むとて花にもいたくめでぬれば散別こそかなしかりけれ

41 よしの山やがて出じと思ふ身を花散なば人やまつらん」十丁オ

名をえたる山の花なれば、さこそ面白かりけめ。苔の庭の上、岩

根に枕をかたぶけ、さすがにいける命のたよりには、谷の清水を結び嶺の木葉をひろひて、寂莫無人聲、讀誦此經

典とよみ、入於深山、思唯佛道のをこなひ、心にあかねども、熊野の方へまいらんと思立て行道の有り様いとあはれのみまさりて、

42をろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつゐのおもひは

43世の中を思へばなべてちる花の我身をさてもいづちかもせんやがて王子にとまりて、いがきのほとりに咲たる花の色におもしろかりければ、柱に書付ける。

44武士のやがみの桜咲きにけりあらくおろすなみすの山風」十丁ウ

登蓮法師人々を勧て、百首の哥をあつらへけれども、いなみ申て熊野へまいりける道に、紀州千里の濱の海士の管屋に伏たりける夜の夢に見るやう、三位入道俊恵申て

いはく、昔にかはらぬことは和哥の道也。是をよまぬ事をなげくと見て、うちおどろきて読て送りけるに、此哥を書そへて遣しける。

45すゑの世も此情のみかはらずと見し夢なくばよそにきかまし

さて那智の御山に参詣の心ざしふかくて、まいり付て、和光同塵の垂然、平等方便の利生、八相成道の果証、般若妙法の法施、真言秘密の法楽、臨終正念往生極樂

のためと礼拝して、日数つもる間、千手観音の瀧に入を見れば「十一丁オ寺僧の来いはく、此上に一二の瀧あり。見給へとす、めければ、則のぼるに、きびしき山の岩のかげ道つたひのぼりて、二の瀧の本にゆきたれば、如意輪の瀧となんいふ有。其まへに

花山院御室の跡侍りける。かたはらに、年ふりたる桜かれんとするを見て、

46木の本を住家とすればをのづから花見る人に成にける哉

とよませ給けんはこ、やらんと覺て、

47木の本に住ける跡を見つる哉那智の高根の花を尋て枯たる桜の枝に花の一ふさ咲たるを見、我身のたぐひとあはれにおほえて

48わきて見ん老木は花も哀也今いくたびか春にあふべき」十二丁ウ  
二卷

西行・西住とて、同俗にてありし時、ともに出家せんよいひあはせしに、西行はや出家とげてけり。西住は出家もせで、ある時の御幸に御供に侍ける。西行を見て、むちをびんにあてけり。西行のごとくに成べきとのこと、思けり。 絵あり

すゑにともに出家して修行しけり。西住いはく、佛の教に頭陀は第一の行也。けうまんのはたほこをたをして菩提の道に入はじめ也。慈悲のたもとをくばめて悪業の衆生の結縁をうけて、東西の獄衆貧道無縁のかたはらに

ことに施を行して、平等一佛の思ひをなさんとして乞食ありく程に、西住が古郷、妻子のある處へ行て経をよみたてるに、内になきける女、簾ををしあげければ

「十二丁オらうたげなる子の五六歳なるがはしり出で、あの乞食の父に似たるとてなく。されどもつれなく経をよみければ、施入しけり。帰るとてかくぞよみける。

49こしかたの見し世の夢にかはらねば今はうつゝのうつゝすれ西住門を出で鳴ければ、西行見て、されこそつれ申さじとは

いひつれ。心よはくはは仏の宮仕はしてんや。薩埵王子はうへたる虎をたすけ、雪山童子は半偈に身をかへ、悉達太子は妻子珍宝まで所望の翁にあたへ、にんにく

仙人は足斗をきらるれども、おしむ事なくてこそ、つゐに佛にならせ給けり。わが友にはかなふべからず、とてはなれける。



さての其暮に鐘の聲きこえければ、

「十二丁ウ

50 またれつる入相の鐘の音す也あすもやあらばきかんとすらん

其あかつき、

51 山陰にすまぬ心はいかなれやおしまれて入月もある夜に

仁和寺御室よりめされてまいりたりければ、おほこと（ママ）に厭

離穢土の次第、有爲無情の理、ちきし道場の因縁、

往生極楽の証拠ども、こまかにとはせ給て後、貫之・

躬恒が流を伝て、大和詞を口ずさむ事、たゞ聖人

ばかり也。同蓮の身とならんために月の百首よむ結

縁申べきよし仰有ければ、十首の和歌をよみてま

いらする中に、

52 うれしとや待人ごとに思ふらん山のは出るあり明の月」十三丁オ

53 月の行山に心を送り入て闇なる跡の身をいかにせむ

54 ふけにける我身のかげを思ふまにわづかに月のかたぶきにけり

55 夜もすがら月こそ空にやどりけれ昔の秋を思ひいづれば

56 月を待高ねの雲は晴にけりこゝろあるべきはつ時雨哉

57 月のみやうはの空なる詠にて思ひもいではこゝろかよはん

58 かくれなく藻に住虫は見ゆれ共われからくもる秋の夜の月

59 有明は思出あれやよこ雲のたゞよはれつるしの、めの空

60 したはる、心やあくとし山のはにしばしないうりそ秋のよの月

（一行アキ）

仰背がたきにより、月の十首をよみてまいらせあげけ

れば御かんありけり。

「十三丁ウ

忍西入道西山のふもとに住けるに、秋の花いかにおもしろかるらん  
といひつかはしたる返事に、色々の花どもに此哥を

そへてを（ママ）こせたりけり。

61 鹿の音や心ならねば留るらんさらでは野べをみな見するかな

返し

62 しかのたつ野べの錦の霧晴ば残おほかるこちこそすれ

伊勢大神宮に思ひ立しに、年比の召つかひしおのこ

出家して、あながちにともせんと申けるをぐして、すゞか山

をとをりけるに、

63 鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかゞ成行我身なるらん

大神宮にまいりつきて、みもすそ川のほとり杉の村立の」十四丁オ

中より、一の鳥居を見拝して思ふに、天の岩戸ひらきしより、

此国わたらひのこほり、神路山のすそに一の勝地をしめて、

天のはたほこをぐして天くらせ給しより此かた、いくわう三千

世界を照し、万民平等の利益し、いすゞ水上よりはじまりて、

一度此地を踏ものは三悪道の苦患はなれ、後安養浄

土の往生をとぐ。人目は情怠不信の者のために、佛経念

珠袈裟僧尼をいむに似れ共、真実には大乘般若の

法楽真言秘密の法施を奉れば随喜の笑をふくみ

給て、忽に二世の願望成就なし給ふなり。

64 宮柱下つ岩ねにしきたて、露もくもらぬ日の御影かな

神路山の嵐みもすそ河の浪を立、汀に月の光をうつし、」十四丁ウ

ゐがきの本に立よればいとゞさやけきに、

65 神路山月さやかなるちかひ有て天下をばてらすなりけり

66 さかきばや心をかけぬゆふ四手の思へば神も佛なりけり

天照御神の砌にて、後世の事祈らんとて、二見の浦にぞ

住ける師親（ママ）の祭主、

67 玉くしげ二見の浦の貝しげみ蒔絵にみゆる松のむら立

とうちながめて、月の夜はたゞにはなかりけり。

68 思きや二見の浦の月をみて明暮袖に波かけんとは

69 浪こすと二見の松に見えつるは梢にかゝる霞なりけり

神路山の桜は吉野にもすぐれ、鳥ゐのほとりの花は南

殿白河の花にもまさりて見えければ、

「十五丁オ

70 岩戸明し天つ御ことの水上にさくらを誰か殖はじめけん

71 神路山みしめに籠る花盛こはいかにしてうれしかるらん

風の宮の花を見て、

72 この春は花をおしまでよそならん心を風の宮にまかせて

月よみの宮にまいりて花を見侍て、

73 梢見れば秋にかぎらぬ名なりけり花面白き月よみの宮

桜の御前の花の風にちるはさながら雪かと覚て

74 神風に心やすくぞまかせつる桜の宮の花のさかりは

吾妻の方の修行と思立てくだりしかども、心とゞまりて

三とせあまりなり。いまは出たゝんとするに名残おしむ人

あまた有ける。折しも月の光あかゝりければ、

「十五丁ウ

75 めぐりあはで雲ゐの余所に成ぬとも月に似行むつび忘るな

76 君もとへ我も忍ばん先だゝば月をかたみに思ひ出つ、

かく詠めつゝ東のかたへ行程に、遠江国にてんり□の渡にて、

舟に乗て渡らんとしけるに、武士の乗あひて、所なし、おりよく

とむちにてさんぐにうつに、西行頭うちわられて血流たる

を見て、供にぐしたる入道あながちになしむを見て、西

行いはく、心よはくも侍る哉。修行をするに過ることもあり

なん。不軽菩薩は、我深敬如等不敢輕慢とおがみ給ひ、

空也上人は忍辱の衣あつければ、杖木瓦石もいたか「」、

慈悲の室ふかければ罵詈謗も聞えず。誠に浅から

ぬ発心ならば、のりうつとも何かはくるしからん。わがともに

「十六丁オ

叶はじ。とくくはなるべし、といひければ、入道いふ様、今までは、

仙洞の北面にて、十善主もたけき心を御感有て召つかひ

給ひ、日の本にかくれなかりしに、さんぐにうち侍る事あさまし

さにたへがたくと申ければ、昔の事思ひ出るによしなしと、おひ

はなち侍りけり。さてたゞ一人さやの中山を越るとて、

77 年（マ）闌て又こゆべしと思きや命なりけりさやの中山

たどり行まゝ、初秋風吹野べのけしきかはりて草村ごとに

虫のね、雲ゐにつぐる雁がねいとあはれにて、

78 おほつかな秋はいかなるゆへのあれば心に物のかなしかららん

嵐の風身にしみてうき。いとゞ大井河の浪を袂にかけて

駿河国岡べの宿とかやに、古き堂の有に立寄やす 「十六丁ウ

みて見れば、古き笠のかけたるを見れば、過ぎぬる春、都にて

一佛蓮台と契し同行、東の方へ修行に出し時、別おし

形見とて此笠に我不愛身命但惜無道と書。

笠は有て主は見えず。あたりの人に尋ねれば、此春の京

より修行者のくだりしが、あの堂にてむなく成とかたり

侍ぬれば、

79 笠はあり身のいかにしてなかるらん哀はかなき天が下哉

かく詠じて行に秋風身にしみ、初雁がねも鳴ぬべければ、

80 秋たつと人はつげねどしられけりみ山のすその風のけしき□

81 白「」を翹にかけて飛雁の門田の面の友よばふ也

昔業平、夢にも人にあはずなり行とながめしうつの山 「十七丁オ

あはれみて、きよみ方を過けるに沖の浪汀をあらふ。月の

かげを見て、

82 清見渇沖の岩こす白浪に光をかはす秋の夜の月

身をうき嶋が原を過行ば、煙たえせぬ富士の山とながめし

登蓮法師が、東にはこと道はありやとながめけん、ことはり

に見えて、

83 風になびくふじの煙の空に消て行ゑもしらぬわが思ひ哉  
かくて足柄の山を越わづらひて、昔よみけん名も足柄の  
山なればきびしき程にと申けん、まことにと思ひて過るに、  
秋風身にしてみて、

84 山里は秋の末にぞ思ひしるかなしかりけり木がらしのこゑ

「十七丁ウ

さがみの国おほばといふ所に、とがみの原といふを過けるに  
しかの聲あはれにきこゆる、

85 嶋まつら葛のしげみに妻こめてとがみが原にお鹿鳴也

其暮に、鳴たつ澤のほとりあはれなりければ、

86 心なき身にも哀はしられけり鳴たつ澤の秋の夕暮

旅の月わが身を伴なひて、山を過る袂にうつりぬれば、

87 しらざりき雲ゐのよそに見し月の影を袂にうつすべきとは

88 よこ雲の風にわかる、しのゝめに山飛こゆるはつ雁の聲

いづくをさしていそぎ行べき所なければ、月にさそはれて

むさし野の草葉を分行程に、こ萩の露、月の光をみ

がき、玉をつらね、虫のこゑぐ、琴・琵琶しらむるにことならず、

「十八丁オ

ほうわう池上の夜の月、ともに山をすぐる心ちして行に、道五

六町ばかり入ば、ほのかに経きこえければ、いかなる事と思ひて、

尋行て見れば、草の庵をむすびて年九十ばかりな□

僧の此経難持持若暫持者我則歡喜諸佛亦然、と読。

八月十五夜のことなれば月ひるのごとし。たがひにあきれて

とばかり有てとふ。いかなる人のかくておはしますぞといひければ、

我は昔都芳門院の侍の長なりしが、院かくれさせ給て、や

がて遁世して、都の人にしられじと修行し侍るに、此野の

草の花に心とめて、此地に住事六十余年、法花説誦

七万八千六百余部也。朝夕の事は人の聞つたへ、時々  
とふに命をたすけ、又幾日も空き事もあり。但時々

「十八丁ウ

うつくしき童子来て雪のやうなる物を口にあたふれば、  
心ゆたかに物ほしからずと語る。たうとくうらやましくて、

89 しげき野を幾一むらに分なしてさらに昔を忍びかへさん

90 いかにせん世にあらばこそ世を捨てあなうの世やとさらにいとはん

みちのくの方へ行程に白河の関屋にとまりて、くまなき

月かけ関屋のことがら面白かりけり。能因が都をば霞と

ともにとよみけん事思ひ出て、関屋の柱に、

91 白河の関屋を人の守からに人の心をとむるなりけり

次の日関屋を出て行に、雨うちそゝぎ暮ぬれば、

92 誰住てあはれしるらん山里の雨降すさむ夕暮の空

白河の関よりおくの野山越過て、はにふの小屋のあやし

「十九丁オ

きに宿をかりけるに、月面白くて、都にて月見たびには

互に、と契りし人思ひ出て、

93 都にて月を哀とおもひしは数にもあらぬすさび成けり

94 月見ばと契りをきてし古郷の人もやこよひ袖ぬらすらん

つばの石文、沼のたけ、ゆりやせんふくなど見て、ある野中

を過けるに、塚の見えけるを、尋ねければ、実方の中将の

はかといふ。其かみ賀茂の臨時の祭に御手洗河に影をうつして、

我身とも覚えずと有けるぞかし。院のうちわか女房心を

つくしてちかごとには、実方中将にくまれかうぶらんと

いひし人也。此国にてむなしくなりし事哀にて、

95 朽もせぬ其名ばかりをとめて置て枯野の薄形見にぞみる「十九丁ウ

あくろつがるの嶋ども、忍の郡、衣川、平和泉、いづれをわきて

詠めあくべしともおぼえず過る程に、ひらいづの秀平

のすき物の本にて恋の哥百首よみけるに、あながちに  
よみてたべとす、めければ、

96 たてそめてうつる心は錦木のちつか待べき心ちこそせね

97 身をすれば人のとがとは思はぬにうらみがほにもぬる、袖哉

秋もやうく暮がたに、蜚のこゑ遠ざかりければ、

98 蜚夜寒に秋のなるま、によはるか聲の遠ざかり行

雪の中に友を待と云ことをよみけるに、

99 我宿に庭の外なる道もがな問こん人の跡つけて見ん

都ならねども年暮るは、人々いそぎあひけるを見て、 「二十丁オ

100 常よりも心ほくぞおもほゆる旅の空には年の暮るは

101 憂身こそいとひながらも哀なれ月を詠て年のくれぬる

年立帰ぬれば、霞と、もに都の方へ立帰行に、ある野中に

梅花咲たる木の本にうつぶしにふして、

102 独ぬる草のまぐらのうつり香は垣ねの梅の匂ひ成けり

103 山がつの片岡かけてしむる野のさかひにたてる玉のを柳

とかくしありきつ、のぼるに、卯月なかりに、みの、国にて

時鳥をき、て、

104 郭公都へゆかばことづてん聲をくしたる旅のあはれは

心にまかせぬ命のながらへて、都に立帰ぬるに、をくれ先だつ

ためし、末の露本の雫、老少不定の世とは誰もしれる事 「二十丁ウ

なれども、此十余年が程に馴し昔の友を尋れば、浅茅が

原の露、鳥辺山の煙とのぼり、むなしき宿あるひは跡も

なし。あるひは葎をさし籠て、昔語になり處百六十余

家也。まして馴むつびずしてよそに見し人其数をしらず。

蝸牛角の上のあらそひ、石火の光のうちのごとし。生ある

は必滅す。尺尊せんだんの煙をまぬかれ給はず。たのしみ

つきてかなしみ来。天人の五衰あり。何にか帰のぼりけん

と、身をはちしめながら、花開実なりては、つゐに其木  
の本に落。胡馬北風にいばひ、越鳥南枝に巢を

くひ、鳥獸に付ても旧を忍心あり。弘法大師は第三

地の菩薩。され共天台五台山の佛法をふりすて、 「二二丁オ

我朝に帰り、菅丞相は太政威徳天神と申て、百万

億の悪鬼とうりやうたりといへども、北野に跡を垂

給へり。まして数ならぬ身なれば、又帰り来けりとうち詠て、

年比しりたりし人のもとに尋行ければ、男は、やうせに

きとて、女房計居たりければ、出ざまに障子書、

105 なき跡に倂をのみ残置てさこそは人の恋しかるらん

106 数ならぬ身には心のもちがほにうかれては又帰来にけり

107 是や見し昔住こし跡ならん蓬が露に月のか、れる

108 あかぬよの別はげにぞうかりける浅茅が原を見るに付ても

109 物思ひてながむる比の月の色にいかばかりなる哀そふらん

京は猶も心のまぎらはしく、さはがしくおほえけるま、 「二二丁ウ

110 杳なる岩のはさまに独ゐて人目思はで物思はゞや

111 憐とてとふ人のなどなかるらん物思ふ宿の萩のうは風

112 しほりせで猶山ふかく分いらんうき事きかぬ所ありやと

待賢門院の堀川の局、後世の事とはんとて、たびくよび

ければ行けるに、人しげきを見て門を過て、月を見るに、

かの使見てかく過るとつげ、れば遣しける、

113 西へ行しるべとぞ思ふ月影の空だのめこそかひなかりけれ

返し、

114 立出て雲まを分し月影のまたぬけしきぞ空に見えける

かくてくまなき月にいと心すみければ、

115 闇晴て心の空に行月は西の山べやちかくなるらん 「二二丁オ

大内裏のあたりを過るに、故鳥羽院の御時にかはり哀



に見えければ、

116 情ありし昔のみたゞ忍ばれてながらへまうき世にもある哉

さて北山のおくにて行ゐけるに、

117 山里にうき世いとはん友もがなくやしく過しむかしきたらん

118 山ざとは人こさじと思はねどとはるゝことぞうとく成行

七月十五夜のあかゝりければ、船岡にて無人のため法花経をよむに、心すみければ、

119 いかにか我こよひの月を身にそへて死出の山路の人をてらさん

虫のこゑを聞て、

120 其おりの蓬が本の枕にもかくこそ虫のねにはむつれめ「一二三丁ウ

121 鳥べ野や鶯の高ねのすそならん煙を分て出る月影

山路はるかに詠むれば、正木のかつら色付けるを見侍て、

122 松にはふ正木のかつら散にけり外山霰風すさむらん

京に出ければ、しりたる人あはんいひけるに、まかりたるに帰らんとて、白地に出て今やゝと待に見えざりければ、心もとなきに雁の啼を聞て、

123 人はこで風のけしきも更ぬるに哀に雁の音つれて行

大原に良暹法師が住ける處へ、人々まかりけるに伴なひて、

124 大原やまだ炭竈もならずと云けん人を今あらせばや

十月の中比宝金剛院の紅葉見けるに、上西門院おはしますよし聞て、待賢門院おはします御時の事思ひて、

125 紅葉見て君が袂や時雨らん昔の秋をおもひいでつ、

兵衛の局のもとへ申つかはしける、

「一二三丁オ

返し

126 色ふかみ梢を見ても時雨つゝふりにしことをかけぬまぞなき

ある人世をそむきて西山に住と聞て尋てまかりたるに、

柴の庵住あらして人の影もなかりけり。あたりの人に尋たる

ことつたへよと帰けるを、あるじ聞てのちに、

127 しほたれしとま屋も荒てうき浪による方もなき海士としらずや

返し

128 笹屋かた浪立よらぬけしきにてあまが住うき程は見えけり

中院の右大臣、出家思立よしかたらはせ給ひける折ふし、月「一二三丁ウ

くまなくてよもすがら哀にて明ければ帰りける。其後其夜

の名残おほかりしこと申あげけるに、

129 夜もすがら月を詠て契置し其むつごとに闇は晴にき

返し

130 すむと見し心の月しあらければ此世の闇ははれもしにけん

爲成朝臣常盤に塔供養しけるに、世をのがれて山寺に

住侍けるに、出たりと聞て申遣しける。

131 古にかはらぬ君が姿にてけふはときはのかたみなりけれ

返し

132 色かへで独残れるときは木はいつをまつとか人の見るらん

ある人さまかへて、仁和寺のおくに住と聞て、まかり尋ければ、

「一二四丁オ

あからさまに京へ出ぬと聞てむなく帰けり。其後又人を遣し

たつねしよしいひける返しによめる哥、

133 立よりて柴の煙の立さをいかゞおもひし冬の山里

134 山里に柴の煙の立ながら心ばかりはすみかへりにき

135 おしからぬ身を捨てやらでふる程に長き闇にや又まどひなん

136 世をすてぬ心のうちに闇籠てまどはん事は君独りかは

此山に年比行て、心あらん先達もがな、大峯に思ふに、南坊の

僧都其時廿八度の先達也。入せ給へ、大峯の秘所ども

おがませべきとあれば入けり。墨染の袂をぬぎかへて、俄にかき

の衣上下になりぬ。さて深山と云宿にて月面白かりければ、



137 ふかき山にすみける月を見ざりせば思出もなき我身成けり

「二四丁ウ

おばが峯と云所に着て、思ひなしにや、月ことにあかく見えければ、しなの、国にあらねども、名にしおひて面白き月とて、

138 おば捨はしなのならねどいづくにも月すむみねの名にぞ有ける東屋と云宿にて、時雨の後の月を見て、

139 神無月時雨晴るれば東屋のむねにこそ月はみねとすみけれ  
千草の嶽とて、木しげき峯に色／＼の木見えければ、

140 わけて行色のみならず梢さへちくさの嶽は心うみけり  
ありのとわたりとて、小築しげくて霧立籠て心ほそければ、

141 さ、のうみ霧こそ峯を朝立てなびきわづらふありのとわたり  
昔児はえとをらずして死にけり。行者は帰けるとなん。<sup>(マ)</sup>春の

山伏は屏風がたけを過る事かたくて、やう／＼修行すると見えたり。

「二五丁オ

142 屏にや心をたて、思けん行者は帰り児はとまれる

三重の瀧を見るこそ難行苦行の徳有て、無始の罪障

消滅して、菩提の岸に付心ちして、大聖明王の降伏の

御まなじりをおがみ、金剛・せいたか童子の利生方便の

御姿を願し、深山岩屋のほとりに、座禪入定の心ちして、

143 身につもることばの罪も顕はれて心すみける三かさねの瀧

深山かはらせすゝ分るせん洞を過つ、しやうの岩屋に参て

見るに、過ぬる百廿の宿／＼尺迦の宿まくさのたけは、

数ならず、平等院の僧正の千日こもりの時

144 草の庵何露けしと思けんもらぬ岩屋も袖はぬれけり

とよみ給ひけんこと今見る心ちして、

「二五丁ウ

145 露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞ずばいかにあやしからまし

此岩屋にて往生の索懷をとげばやと、思ひけれ共、先達

ゆるさゞりければ、同行につらなりて帰にけり。大和の国古畑の峠に山鳩の鳴ぬ。かつらぎ山を見やれば、折にもあらぬ

紅葉の見えけるに、

146 古畑の峠の立木のゐる鳩の友よぶ聲のすこき夕暮

147 かつらぎや正木の色は秋に似てよその梢は緑なりけり

148 夕されば松原が峯をこえ行ばすこく聞ゆる山鳩の聲

里に出ぬれば同行どもおもひ／＼に別にけり。其中に心ある同行ことに別おしみ、又いつあふべきと袖をしぼりければ、返事に、

149 さりととも猶あふことを頼む哉死出の山路を越ぬかぎりは

「二六丁オ

其時先達南坊を中尊とし、百日同心合力の同行を

孝子と思ひ、罪障消滅の教化に預りて、深谷の水□

た、きて水を汲、高き峯の薪を取、先達の足を洗て、

金剛秘密坐禪入定、安養浄土にすく行りと覺侍り、

をのく柿の衣の袖しぼり、ちり／＼になる暁、ぬへの鳴を聞て、

150 さらにぬだに世のはかなさを思ふみにぬる鳴わたる曙の空

同行もみな別ければ、たゞ一人本の墨染の衣になりて、

住吉にまいりて見れば、頼政<sup>(マ)</sup>住吉の松の隙よりながむれば

入日をあらふ奥つ白浪、とよみけんもことほりと覺て、

151 古への松のしづえをあらひけん浪を心にかけてこそ見れ

152 住吉の松の根あらふ浪の音を梢にかくる沖つしほ風 「二六丁ウ

其年は住吉に籠行居て、年立帰れば都の方へ行けるに

津の国の難波渡を詠けるに、春風芦の枯葉を吹を見て、

153 津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉を風渡也

さすがにしなれぬ命なれば、都に帰て、古しへの住家をみれば、

荒はて、あはれに侍れば、

154 昔見し庭の小松も年ふりて嵐の音を梢にぞきく

155 いづくにもすまれずはたゞすまであらん柴の庵のしばしなるよに  
昔見馴し事なれば、法勝寺の花見にまかりたりけるに、

じやうせい門院の女房花見られける中に、兵衛の局の本へ花  
の御幸をや思出給けん。其日雨ふりければ、

156 見る人に花も昔を思ひ出て恋しかるらし雨のこぼる、「二七丁オ  
かへし、

157 古しへを忍る雨とたれかみん花も昔の友しなければ  
かくまどひありく程に、住馴し宿いかならんと、其門を見入

ければ、ちごの六七ばかりなるが、せんざい花にあそびありくを、  
つくぐと見れば、此ちご、門に乞食法師の見るがおそろしきとて

内へにげ入にけり。かくとつげまほしけれども、心よはくてはとお  
もひて行過けり。妻子珍宝及王位の文の心を観じて、

山深き住居ぞよくおほえける。

158 山ふかくさこそは心はかよふともすまで哀はしらんものは  
六卷

平等院の名書れたる率都婆に紅葉ちりかゝりたるを

見て、花より外にと読けん人ぞかしと、あはれにおぼえて、「二七丁ウ  
159 哀とて花見し峯に名を留て紅葉ぞ今日は友に成ぬる

かく行てありくに、新院和哥を御このみ有とて、中院  
右大臣の御奉行にて恋の百首をめされけり。勅宣そむ

さがたき故に、六首つらねまいらせ上たりける。

160 何となくさすがにおしき命哉ありへば人や思しるとて

161 数ならぬ心のどかなしはて、しらせでこそは身をもうらみめ

162 思しる人有明のよなりせばつきせず物は思はざらまし

163 俳の忘らるまじき別かな名残を人の月に留めて

164 うとくなる人を何とてうらむらんしられでしらぬ折□ありしに

165 今ぞしる思出よとちぎりしは忘れんとての情なりける

あひたのみたる人の、東へくだりけるもとへ遣しける、「二八丁オ

166 君いなば月待とて「」めやらん東の方の夕暮の空

四国のかた修行せんと思立けるに、賀茂の社に参りて

いとま申、御幣など奉てけり。仁安二年十月十日なりければ、

月くまなかりけるに、又帰らんこともしらず、此度ばかりと哀にて、

167 かしこまる四手に泪のかゝる哉又いつかはとおもふあはれに

其比侍従の大納言のもとへ申送りける、

168 嵐吹峯の木葉に伴なひていづちうかる、心成らん

返し

169 何となく落る木葉も吹風に散行くかたをしらやせぬ  
待賢門院の女房中納言の局、世を遁て小倉山の麓に

庵を結びて住けるにまかりて見れ憐なる住居なり。「二八丁ウ  
寛の水たえぐなされ、風の音物さびたり。此人昔は見め

ことがら世にすぐれければ、人々心をつくし給ひき。今はくろかみに  
つもる雪まゆにかゝり、面にたゝむなみかさなれり、衣はこき墨ぞ

めのなりけるを見て、  
170 山下す嵐の音のはげしきにいつならひけん君が住家ぞ

此歌を見て同院の女房兵衛の局  
171 憂世をば嵐のかぜにさそはれて家を出ぬる住家とぞ見る

小倉山を見れば梢霧まがひて見えければ、  
172 雲かゝる遠山畑の秋さればおもひやるだにかなしき物を

天王寺へまいりける道に、雨降ければ、江口の君がもとに宿□  
かりけるにかさざりければ、君のならひせひくたる物にこそ「二九丁オ

宿はかせ、たゞ一人まどひあ□く修行者なればかさぬもこ  
とはりなりとはちしめて、

173 世中をいとふまでこそかたらめかりの宿りをおしむ君哉  
返し

174 世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ  
新院、御ぐしおろして仁和寺におはしましけるに、月くま  
なかりけるに、

175 かゝる世に影もかはらず澄月<sup>すみ</sup>を見る我さへにうらめしき哉

すでに讃岐の国にくだらせ給てのち、世中に歌よむ  
人絶てきかざりければ、寂然がもとへ遣しける。

176 言の葉の情たえぬる折ふしにありあふ身こそかなしかりけれ

「二十九丁ウ

返し

177 敷嶋やたえぬ浪路に鳴くも君とのみこそ跡をしのばめ

天王寺に籠るけるに新院讃岐へくだらせ給ふ。別おし

みける人のかたへ、

178 ながめをかん君も心やなぐさむと帰らんことはいつとなくとも

都の外も月はくまなかりけるとて、

179 月の色に心は清くそめましや都を出ぬわが身なりせば

讃岐にて御心ひきかへて、後世の御つとめ隙なくせさせ

おはしますと聞て、年比しりたる女房のもとへ、

180 世中をそむくたよりやなからましうき折節に君があはずば

新院かくれさせ給て後、四五年計ありて讃岐の 「三十丁オ

松山の津と云所に行て、故院のおはしましけん所たづねけれ  
ども、かたも見えざりければ、

181 松山の浪に流てよる舟のやがてむなしくなり 「 「 な

182 松山の浪の心はかはらじをかたなく君はなりましにけり  
さてしろみねと云所に御はかの侍りけるにまいりてみれば、  
其跡とも見えず、葎はひしげりていつ人のかよひたりとも  
見えず。なみだをさへがたくて、

183 よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後はなに、かはせん

同国の中に善通寺と云て弘法大師生れ給たる所に  
心とまりて、庵を結び二三年住侍りけり。大師の御旧  
跡なればはなれがたくて、

「三十丁ウ

184 今よりはいとはじ命あればこそかゝる住居の哀をもしれ

庵の軒に松の有けるに、松ものいはゝいかり契りせましと、

185 爰に又我住うくてうかれなば松は独にならんとすらん  
暁立出<sup>ツ</sup>にけるに、此松にかくぞ書付けける。

186 久にへて我後の世をとへよ松跡忍ぶべき人もなき身ぞ

又京に帰りて昔ゆかり有所にとまりて、こしかた行末の

物語して袖をしぼりける。主のいふやう、さてもいとおしがり給し

姫君の事御母さまかへ姫君と京におはし侍しに、九条の

民部卿の御むすめ、冷泉殿と申人子にし給ひ、いとをし□り

給ひしかば、母は高野の天野に行ひて、今年十七年に

なり侍なり。此程冷泉□むかふはらの御むすめにはりまの 「三二丁オ

三位と申をむこにとり給ひ、このあね御ぜんは上臈女房に

なし給ひけり。明暮佛神に今生にて父の行末しらせ

給へと申て、なげき候ふ外はなしと語ければ、西行さらぬ様に

聞なし、其次の日冷泉殿のかたはらの小家にまかりて、むすめ

をよび出しければ、むすめは我父修行に出給ひたると聞しとて

出て見るに、こき墨染の衣にやせくにならせ給ひたる姿を

見るに涙とゞまらず。西行つくぐと見るにおさなかりし時には

おひかはりてけかたかくいみじく見ゆ。西行むすめにいふ様、親と

なり子となるも先世の契也。我いふ事にしたがふべしと

いひければ、おやにてましませばいかでかそむきかといふ。いとけ  
なき時は、院のうちへまいらせいかにもと思ひしかども、我身かく成

「三二丁ウ

ぬればよしなし。此世は夢まぼろしのごとくけふあるものはあすなし。

たゞ尼になりて母に伴なひて後世をねがひ候へといひけ

れば、むすめ、うれしき事也。ちゝは、にもそひまいらせねばいかなる  
隙もがな、さまかへんとおもひさぶらつれ、とてしかくの日そこくと  
契て立別れぬ。其日になりぬればまかでけり。冷泉殿待かね  
給ひてむかへをやり給へれば、さまかへ出給たるといひければ、  
此ひめの六つの年よりそだてしにとて、なきかなしみ給ひけり。  
さて西行かくぞ、

187 消にける本の雪を思ふにも誰かは末の露の身ならぬ

西行むすめをむかへとりて、たけなるかみをゆひ分て、出家を  
とげさせけり。さて彼山の麓あまの、別所母のもとにおはして

「三三丁オ

後世をとり候へとしめしけり。さて母のもとを尋行て、ともに  
行けるこそあはれなれ。西行今は思ひ残すことなし。

188 のがれなくつゐに行べき道をさはしられでいかゞ過べかりける

189 月を見て心乱し古の秋にもさらにめぐりあひけり

其後大原野のおくに籠行なひけるに、関伽水も氷ければ

春にならでくまれじと思ひしに、春もとけざりければ、

190 わりなしや氷るかけひの水ゆへに思ひ捨てし春のまたる、

191 山路こそ雪の下水とけざらめ都の空は春めきぬらん

192 大原は比良の高ねの近ければ雪ふることを思ひこそやれ

白河の花見にまかりけるに、雨ふりけれども、人の花の下に

車をたて、詠けるにつかはしける、

「三三丁ウ

193 ぬるともと花をたのみて思けん人の跡ふむけふにも有哉

郭公の哥どもよみけるに、待賢門院の女房堀川殿

御局のもとより時鳥のさかりにかくいひをこせけり。

194 此世にてかたらひをかん時鳥死出の山路のしるべとせん  
返し

195 時鳥鳴くこそはかたらはめしでの山路に君しかたらば

院かくれさせ給けく、御はうふりの夜、高野より思はずに  
まいりあひたりけるに、そのかみ左大将実能大納言の時、つ  
ゐの所御覧じに御幸なりける御ともしけるが、又其夜の  
御ともし給ひけるを見て、

196 こよひこそ思ひしらるれ浅からぬ君に契のある世成けり「三三丁オ

納奉りける所を見れば、あまりにかなしくて、

197 道かはる御幸かなしきこよひ哉かぎりの旅と見るにつけても

納奉りて御ともの人く皆帰りけれども一人残て御とぶら  
ひせんとて、明るまでありてよめる、

198 とはじやと思よらでぞなげきまし昔ながらの我身なりせば

廿五歳にして仙洞北面を出て、諸国修行する事、五十余

年過ぬるはたゞ夢也。年々歳々花相似、歳々年々人

不同、一日一夜の中に八億四千の懺悔の六情根のために

三十一字の大和ことばを口すさみぬ。齢八十に成ぬ。行

歩かなはねば、双林寺のほとりに庵を結びて、観念の

窓のうちには三明の月の光を友なひねむることなし。

「三三丁ウ

堂寺のみぎりの花盛を待て尺迦如来入滅の日をは

らん事をねがひて。

199 ねがはくは花の本にて春しなん其二月の望月の比

(以下空白)

「三四丁オ

建久元年イ本九年トアリ二月十六日に西行卒

200 仏には桜の花を奉れ我後の世を人とぶらはゞ  
如此詠をはりけるとなん。

定家

201 望月の比はたがはぬ空なれど消けん雲の行ゑかなしき

菩提院の三位中将のもとへかくよみける。返しに 公衡

202 紫の雲と間にぞなくさむる消けん雲はかなしけれども

西行住ける庵の花を見て、沙弥寂然、行尊がもとへ遣しける。

203 ながめけん人ぞ恋しき桜花此二月の比ときくにも  
返し

204 なき跡の花にちぎりし二月の半の月も西へ行哉 「三四丁ウ

(半丁白紙)

「三五丁オ

此書写之本不審等数多侍り、後日以他本  
可校合のみなり。

八幡橋本満介入道

于時慶長五曆<sub>子庚</sub>十一月吉辰

等安

「三五丁ウ

(東京大学史料編纂所特任研究員)  
(二〇〇七年一月三〇日受理、二〇〇八年七月二九日審査終了)